



ロサンゼルス・オリンピック(1932年)での対インド戦。左端のゴールキーパーが濱田氏。右下は銀メダル。

「ホッケーの銀メダル」

——ロサンゼルス・オリンピックの思い出——

はま だ しゅんきち
濱田 駿 吉 (慶應義塾体育会ホッケー部OB・昭8経)

一九三二(昭和七)年のことですから、今から七十四年前と大昔のことです。ロス五輪(第十回大会)ホッケーのメンバーは十五名のうち私も含めて二人が塾生、二人がO

B佐藤武雄団長と浅川増幸主将、日本選手団の団長も塾の平沼亮三さんでした。ホッケーに出場したのは日本、米国、インドの三カ国だけでした。ヨーロッパの強豪国は第一次世界大戦後の疲弊から、アメリカ西海岸まで選手を送ることを断念。英国の不参加は植民地インドの強さを知り、負けることを恐れたためとも言われていました。

当時の船旅では、ロサンゼルスまで十七日間かかりました。ロスでは大変な歓迎を受け、フォードの新車に乗せられてOgden(市庁舎)に直行。そこで三段跳びの織田幹雄選手が、市長さんらしき人から大きなキーを渡され、「これでロスを自由に見物してくれ」と言われました。我々はバスの乗車券をもらい、空いた時間に街をまわりました。選手村は今のビバリーヒルズにあり、我々はその間にテントを張って寝泊りしました。夏のロスは雨が全く降らないのに、不思議なことに始終水を撒いている。水源はどこかと思えば、ロッキー山脈からふんだんに運ばれてくることでした。

開会式は満員の聴衆で感激も一入でした。肝心の試合ですが、初戦は強敵のインドで、会場は開会式をやったオリンピックスタジアムです。試合経過は前半一方的に攻められて0-4、しかし後半に日本はついにインドゴールを割り、貴重な1点をもぎ取り話題に。結果は1-11で敗戦。しかし続く米国戦では、我々が一方的に攻めて9-2で勝利し、銀メダルを擲んだのです。これは日本の団体競技での初めてのメダルです。

帰りの船中では塾生の陸上選手竹中正一郎君と塾生ボート選手らと酒をこたま飲み、酔っ払って、怒られてハワイ上陸を許されなかった思い出もあります。横浜に帰港したときは大活躍した水泳選手とともに、熱烈な歓迎を受けました。

銀メダルですが、戦災や阪神大震災といった苦難を越え、この二月塾ホッケー部創部一〇〇年記念式典席上で寄贈し、新しくできた日吉の「下田学生寮」内の部室の一角に飾られることになりました。